

7、人と人とのつながりーコミュニティからビジネスまで1～∞の可能性ー 山内翔太郎

- (1) 私の出身である宮城県は、2011年に発生した東日本大震災において甚大な被害を受けた。その際、多くの人や建物、歴史、それまで築かれてきたたくさんのものが失われた。その一方で、得たものが多くある。今回、『地域資源』というテーマを取り扱うにあたって、私が実際に見聞きしてきたものの中から提案したいものがある。
- (2) 今日では、震災というのは私たちの経験から言えば決して良いイメージとしては受け入れられてはならず、物事を論じる際に敬遠されることもよくある。しかし、今回の報告ではその震災というのを一つのきっかけとして、プラスの方向にもマイナス方向にも、その本来の意味を超えた様々なテーマの問題に対する有機的なつながりに注目していきたい。
- (3) 震災を機として私の日常は大きく変わり、周囲とのつながりが確実に変わってきた。まず、私が住んでいた地域の近くには、社会福祉協議会に日々通う震災ボランティアの人たちが仮宿とする「テント村」なるものができた。そこには全国各地からたくさんの人たちが集まってきた。私の父は、仕事の傍ら毎週末そのテント村へ足繁く通い、支援に対する地元住民としての感謝の意を込めてたくさんの人たちと交流を重ねた。その後私の父はそのボランティアの場を福島へ移し、未だ避難生活を送る人々のもとへ支援団体の一員に加わることで交流を続けた。私も途中からその活動に加わることになったのだが、その参加した団体というのは実に多国籍であり、アメリカ、オーストラリア、中国、フランス、カナダ、南アフリカと、これでも列挙しきれないほどの国籍の人たちが参加するものであった。その活動では、中心のメンバー以外は仕事などの影響もあり、人が流動的に入れ替わっていた。毎回新しいメンバーが参加して刺激を受け、毎回参加しているメンバーへ新しい刺激を与え返し、という関係がそこにはある。そこで出会った人たちが初対面の相手と思わぬ共通点や新たな可能性を見出しているのをこれまでたくさん見てきた。ドイツの雑誌に震災をテーマとした記事を掲載する際に私の父も含んだ幾人かの人たちが協力して情報を提供した。その雑誌を見た時には、ドイツ語で何が書いてあるのかはほとんどわからなかったが、小さく映る写真などでなんとなくであるが遠くドイツでも私の身近な出来事が伝わっているのだと実感した。支援をするために集まった福島のその地域では、本来の目的に加えて新しいきっかけが生み出される場所として存在しているように思えた。
- (4) この、一連の震災ボランティアの活動を通して出会った人たちと、次なる場面での可能性を感じることができた。それは、そこで出会った人とのビジネスでのつながりだ。父は、そこで出会った人の中の何人かと活動の場以外でも交流を深め、それまでの仕事に加えて新しい境地でチャレンジをすることが可能になった。この事例においてはきっかけが震災というものであったが、これはあらゆるもので応用が可能であることが考えられる。私が考えるに、その過程で重要であったのは

きっかけの重要度である。震災というものに対して人一倍の興味や関心、考えがあったからこそ出会った場での結びつきが強かったのだろう。人と人が出会う場というのは全国各地、世界各地にあり、私たちの身近にもたくさんのもが存在しうる。それを能動的に求めた先に同じ考えの人がいる、という点では私たちが学ぶ大学というのは非常に条件に適した場所であると言える。

- (5) 地域資源を確実に利用していこうと考えていく際に大事になっていくのは、その動きがどれだけの持続性を持っているか、というのに拠るのが大変大きい。私がこれまで身近で起きてきたことを総括して考えると、ただ何となく人と人が出会うよりも、ある一つ、もしくはそれ以上の意思を共有したうえで出会う方が一段とその後につながりというのが強固なものになっていくと考えられる。そして、それらの出会いが持つ可能性も大きく広がっていくことは間違いないだろう。モノや場所、ハードなものを改善、発展させていくことはもちろん目に見える形で成果が出やすく、誰もが考えるに易いものである。しかし、その一方でそれと同時に私たちが生活を送る地域社会というのは、必ず存在する、人と人とのつながりによって作りあがっている。人と人とのソフトの部分成すものを無視することはできない、と私は言いたい。